

二十一世紀は、人権の世紀といわれています。幸せに生きるための権利である基本的人権が、全ての国民に保障され、差別や偏見をなくし、真に平和で幸福な社会が実現されることに大きな期待が寄せられています。

ところが、私たちの現実の生活の中には、女性・子ども・高齢者・障がい者・同和問題・外国人・刑を終えて出所した人・性的少数者（セクシュアルマイノリティ）などに対する差別やインターネット等による人権侵害など、早急に解決を図らなければならぬ問題があります。町では、すべての人の人権が尊重され、誰も傷つかない、誰も傷つけない、そして誰もが生きがいをもって生活できる、人権が擁護されたまちづくりを推進し、もってあらゆる差別のない社会を実現するため、平成二十九年三月三十一日に「あらゆる差別の撤廃をめざす人権擁護条例」を施行しました。その後さらに「大泉町手話言語条例」や「大泉町犯罪被害者支援条例」を施行しています。

また教育啓発活動としては、町ぐるみ人権教育推進大会や人権教育指導者養成講座、地域単位でのふれあい人権啓発促進活動、人権問題学習会等を行っており、いろいろな場面で町民の皆様とともに考える機会をもつけ、一人ひとりの人権が尊重される町づくりの実現をめざしています。

町内の小・中学校でも、「人権教育の充実」に重点をおき、生命や人格を尊重する、他人を思いやるなどの豊かな人間性や、差別や偏見をなくすための実践力をもった児童生徒の育成を図っています。

小・中学校の児童生徒は、ポスター・標語・作文を作成することで、学校で学習した人権の尊さについて見つめなおし、それぞれの思いを表現しています。町では、そうした作品の中から各校の代表を選び、いずみの杜の回廊や町公民館ロビーに展示して町民の皆様にご覧いただくとともに、各学校に巡回展示をしています。

この冊子は、小・中学生がどのように人権について考え、どのような願いをもち、どのように解決しようとしているかを、さらに多くの町民の皆様を知っていただきたく、その作品の一部を掲載したものです。

皆様が人権について考える上で、この冊子が、少しでもお役に立つことを願っております。

「あたりまえ」を見直そう

大泉町立南中学校 一年 川崎 慧 良

人権は、人が人として社会で考え、自由に行動し、幸福に暮らせる権利です。簡単に言えば「あたりまえ」に生きられる権利です。もしもこの「あたりまえ」がこの世から無くなってしまったら、私達の生活はどんなことになってしまうのでしょうか。

例えば、病気になったときに治療を受けられなかったり、好きなものを食べたり飲んだりできなくなるのではないのでしょうか。なぜ治療を受けられないだと、反論することもできなくなるでしょう。自分が好きな人ではなく、親が決めた人と結婚することになるかもしれません。自分がやりたいことができなくなると、どんどん窮屈な生活になっていきます。人権がどれだけ私達にとって大事なことなのか、こう考えてみると、ものすごく実感できます。

でも世界には、自分の好きなことができないのが「あたりまえ」という人々がいます。私達の「あたりまえ」ではないことが、世界の誰かの「あたりまえ」になってしまっていることを自分も含めてみんなが知っていく必要があると思います。

日本には、どのような人権問題があるのか調べてみました。よく目にするのは、女性に関するものです。「男は仕事、女は家庭」というように男女の役割を固定的に考える意識が日常生活の中に根強く残っているそうです。確かに重いものを配るときに、大人の人がよく「力持ちの男の子、手伝って」と言っていました。これは、男は力持ちという決めつけだと思いました。そういう決めつけが男女の差別を生む原因になりかねないと思います。これからは「力持ちの人、手伝って」と言う時代なのかもしれません。

また世界の人々の人権を守ることはできないけれど、自分の身の回りの人

権を守るために私にも何ができるのか考えてみました。色々考えた結果、誰に対しても平等に普通に接することだと思いました。この人は嫌い。この人は好き。そういうせまい考えで接し方を変えるのは、人権侵害につながるものだと思います。また「決めつけ」や「思い込み」もかんちがいやすれちがいをつくり出し、お互いのコミュニケーションがうまくいかない原因になると思います。私たち一人ひとりには「ちがいが」があることも忘れてはいけません。その上で意見や文化のちがいがいも含めて認め合うことが大切だと考えます。そのためにも、私はまず相手のことを尊重しながら話すことから始めようと思います。

言葉の刃物

大泉町立南中学校 一年 笹 小 春

私は最近、ニュースで誹謗中傷と言う言葉を、よく聞くようになった。私はその言葉の意味を、なんとなくでしか知らなかった。だから意味を調べてみた。誹謗中傷とは「人や企業の社会的評価を低下させるような根拠のない悪口やデマを言いふらす、又はそれらをインターネット上に投稿したり、人格攻撃する行為である」と書いてあった。私はこれを知って、自分がされたらすごく悲しいと思った。どうして、最近誹謗中傷が増えたのだろうか。

最近の日本の人達はスマホの所持率が高い。それにもなるとネット上では、匿名で何かを発信したり、発言することが広まっている。そしてその中には誰かの投稿に対して匿名で、相手への嫌がらせや、不快になるような言葉を発信する人がいる。その人は、かるい気持ちで送っていたり、面白半分で送る、または意図的に送ったりしている。一人で送るだけでなく集団で送

る人もいる。かるい気持ちで送った一言が相手を傷つけたり、相手の命を落としてしまうほどの刃物になることを忘れてはいけない。私は相手を傷つけないようにするにはどうしたらよいか考えた。まずは何かを発信するときに相手が誤解を招くことがないか、相手が勘違いすることがないかをしっかりと確認することが大切だと考えた。悪口になるような言葉がふくまれていなければ確認する必要がある。そうすれば相手が傷ついたり、悲しくなったり嫌な気持ちになることはないと思う。私も相手になにかを伝えたりするときには一度頭の中で考えてから、相手の立場にたって伝えるようにしたいと思う。私はこの作文を書いていて、自分は本当に相手を傷つけていないのかどうかを考えるきっかけになった。私はだれかのことを傷つけたことは、自信を持って「ない」とは言えない。でもちよつとしたけんかなだけで、大きな事にはならず、今はその子とも仲の良い友達だ。これからはもっと自分が意識すれば相手が傷つくことはないだろうと思った。誹謗中傷だって、自分からまず気を付けていきたい。一人一人の意識を変えることで傷ついたり、命を落としてしまう人達はへらすことが出来ると思う。言葉の刃物で亡くなってしまう人のいない、みんなが安心してすごしていける平和な世界ができると良いなと思った。そしてそんな平和な世界を創っていくのは、私たちのこれからの行動にかかっているにちがいない。

みんなちがってみんないい

大泉町立南中学校 二年 ゴンザレス ユイ

「あなたは変じゃない、とても美しい」
この言葉は母がくれたものだ。

私は、日本生まれ日本育ちのペルー人だ。いわゆる外国人つてやつだ。私は生まれた時から周囲の人とは肌の色が違う。その事が原因で小さい頃から嫌がらせを受けてきた経験がある。

保育園に通っていた頃は、日本語がままならなかったこともあり、人から言われた嫌な言葉はすべて耳に入らなかつた。

小学生になると私はすっかり日本語を理解し、話せるようになった。だから聞きたくない言葉も理解できるようになった。

小学二年生になると嫌がらせからいじめへと変わっていった。私の事を無視したり物を壊される事もあった。だから私は転校した。転校した先ではいじめはなく、みんなと仲良くすることができた。

小学五年生の頃、アメリカで起きた「黒人差別」のニュースを目にした。白人の警察官が息ができないと訴える黒人男性を押しさえつけ死亡させたニュースだ。私は怖くなった。小学生ながらに私は思った。「なぜ黒人だからといって差別を受けなければならぬのか」と。

ある日、親友に聞いた。「私、外国人だけど、友達でいいの」と。返ってきた言葉は、「そんなの気にしたことない」だった。その子は、私にとつてたった一人の大親友だ。今でも、私は周りからの視線を気にしている。みんな心の中で私のことをどう思っているのか不安だ。

私はきつと、一生この気持ちで生きることになるだろう。生きていく以上自信を無くすかもしれない。でも私は自信をもって生きていく。好きな事をし、やりたい仕事にも就く。これらをするには人一倍努力が必要かもしれないけれど、私は叶えたい。

このように考えるきっかけをくれたのは、母だ。私は毎日、何度も自分に言う。「私はみんなと同じ人間。何も変らない」と。

私と同じ気持ちで生きている子に伝えたい。「あなたは変じゃない。とても美しい」と。私は思う。日本人も外国人も違う美しさがある。私は世界中の

みんながこう思えばいいと思う。

私は、差別もいじめも全てでなくせるとは思わない。ただ、みんなに一人一人が違う美しさを持つている事を知ってほしい。世界中のみんながこの考えを持つてくれたら、生きやすい世界になると私は思う。

私は毎日世界にこう叫び続ける。「みんな違ってみんないい」と。

違いも互いに認め合えたなら

大泉町立南中学校 二年 後藤 優空

「では、次のニュースです。女子プロレスラーの木村花選手がインターネット上での誹謗中傷により自殺しました」。何気なくニュースを見ていた私ははっと息をのんだ。『誹謗中傷』最近たまに聞くこの言葉。悪口などを書き込むなどして、相手の人格や名誉をおとしめたり、傷つけたりする行為。『自殺』胸が締めつけられるように苦しかった。この行動を起こすまでに、どんな気持ちだったのか。私は思うのだ。「違いも互いに認め合えたなら・・・」。私には好きなインターネット活動者たちがいた。そのグループは私にとっても、とても輝いていたし、毎日、笑いを届けてくれる憧れの存在だった。だが、ある時メンバーの一人が脱退を発表した。衝撃的だった。しかし最も驚いたのが、脱退を決めた理由であった。『誹謗中傷』脱退を決めたその人は、長い期間、インターネット上の誹謗中傷に悩んでいたという。「また活動を再開したい」「大好きなメンバーと一緒に」という風に思っていたが、日を増すごとに活動すること自体が難しく感じるようになったそうだ。

また、この人が辞めるきっかけとなった誹謗中傷には『容姿に対してのもの』や『グループ全体に対してのもの』などがあった。私には、これらの誹

謗中傷がどんなにつらいのか分からない。だが、きつと、「つらい」「苦しい」「怖い」「悲しい」のような、良い気持ちではないことは伝わってくる。

なぜ、誹謗中傷をするのか。「自分と違う価値観や意見を持っている」から？「どんなことを言ってもバレないと思う」から？私は誹謗中傷を繰り返すような人を許すことはできない。その一言によって、誹謗中傷を受けた人の人生が変わってしまうかもしれない。立ち直れなくて、諦めてしまうかもしれない。考えるだけで、胸が締めつけられるように苦しかった。

誹謗中傷をなくす。そのために私は、一つ一つの言葉の使い方を変えてみることを思いついた。例えば、「変」「おかしい」を「個性がある」のように変換してみたら、どうだろう。きつと、嫌な気持ちにはならないのではないか。最後に、「表に立つ人には何を言っても大丈夫」ということは絶対じゃない。誰もが一人一人を尊重し、違いも互いに認め合える世界になってほしい。

理解ある平等な社会に

大泉町立南中学校 三年 川野 実鈴

私には、数年前に亡くなってしまった祖父がいる。その原因は前立腺がんだ。祖父はいつも明るく、とてもアクティブな人だった。がんが発病する前は、平日には会社でバリバリ働き、休日には釣り、登山、マラソン、楽器演奏、日曜大工などをして、忙しい日々を送っていた。実際、私と兄は祖父と一緒に登山に参加したことがあった。

そんな祖父のがんが発覚したのは、すでにステージ四の時。前立腺がんはステージ四の生存率が五十パーセント以上、ステージ三以下の生存率が八十

パーセント以上と、他のがんと比べて生存率が高いものだった。一方でがんが骨に転移しやすく、祖父はがんが発覚した時点で首の骨に転移していた。

そのため最初の入院は首の手術から始まった。

祖父の病状が少し落ち着き、退院してからは死んでしまっても悔いのないように、と親戚みんなで集まって、祖父の行きたい場所へ旅行に行った。それはとても楽しく一生忘れられない大切な思い出になった。それからあまり時間がたたないうちに、がんが進行し、病状が悪化してしまった。足が自由には動かせなくなり、車いすでの生活になった途端に祖父一人ではできないことも増えていった。例えば、段差のあるところを移動できないこと、一人でお風呂に入れないことだ。まずは移動を少しでも楽にできるようにするため、祖父の家では段差のあるところを坂にしたり、玄関にスロープをつけたりしていた。また、お風呂の面では介護士さんを家に呼ぶことでサポートしてもらいながら、お風呂に入っていた。このように体が自由に使えない人への生活のサポートをすることが、私はとても大切だと実感している。最近、病気や障がいを抱えている人への看病が大変で家族が殺してしまったというニュースを目にすることがある。私はそのようなニュースを見るたびに悲しくなる。看病する大変さが殺害する理由になってしまうくらい、抱え込む前に何か行動できなかったのだろうか。私はそれを防ぐことのできる方法はたくさんあるのだと思う。

私は、体の不自由な人も過ごしやすい環境を作っていくことが大切だと思っている。そのためには、まず、身近にできることはないかと考え、行動することが必要だ。差別や偏見をなくすこと、そして、病気や障がいを理解すること。自分には関係ないと思うのではなく、自分のこととしてよく考える。何より、祖父のように一日一日を明るく大切に生きていきたい。そして、私は目の前にあることに全力で取り組み、病気や障がいについての理解を深め、みんなに分け隔てなく平等に接することを改めて考えていきたい。

一番悪い事

大泉町立南中学校 三年 小林 瑠 菜

私は、「指をさす」という行為が、嫌いです。

私は、「指をさす」という事について調べました。指をさすことは、心理的に見て、相手を威嚇する、相手を受け入れていない、挑発するなど言われています。ワンアツポジションという名前のように、自分の方が上の立場だと思ふ人もいるそうです。逆に、指をさされている人は、どう思っているのか、調べてみました。挑発、侮辱されているという気持ちになって、嫌な思いをします。だから私は指をささない方がよいと思いました。

しかし、使い方によっては、必要な時もあります。何かを伝えるために指をさすのは、必要なことです。また、一く十月月の赤ちゃんも、指をさし始めるそうです。関心を共有したり、何かを要求したり、様々なコミュニケーションで使われます。私は使い方に気をつければ使っても良いなと思いました。

なぜ私が、指さしを嫌いになったかという、それは、家族と出かけた時でした。弟が車椅子の人に対して指をさした時に、母が

「指をさしてはいけないよ。失礼でしょ」

と言っていました。相手の方は、

「大丈夫だよ。気になるよね」

と言っていました。子どもの私でも分かるくらい、気をつかっていたと思いました。私はその後、母になんで指をさすのがダメなのか聞いてみると、「失礼だからだよ。相手が辛い思いになってたのが分かるでしょ」

と言っていました。その後、家に帰って調べてみると、人に指をさすというしぐさは、世界各国共通で、いけないことであると言われていることが書か

れていました。悪意を持ったしぐさの中で一番と言われているほど悪いことだという事が分かりました。私は、弟が指をさした人に、とても悪い事をしてしまった、とても失礼な事をしてしまったなと思いました。

だから、どんなに良い事でも指をさすのではなく、指をひるげて、掌を向ければいいなと思いました。しかし、その方法で、相手を侮辱したり挑発したりするのは、絶対にしては、いけません。

私は、今まで生きてきた中で何回指をさしたか、それで、嫌な気持ちになった人が、何人いるのかわからないけれど、これからは相手の気持ちを考えながら行動したり、どんなに良い事でも、指をささないようにしたいです。障害をもつ方に限るのではなく、大人や子供、性別、何にも関係なく、接していいこうと思います。

これから、明るい世界に、今後、変わって行く事を期待しています。

いじめや詐欺

大泉町立北中学校 一年 小林 瑠華

私はよくニュースでいじめのニュースが流れてくると「また、いじめかあ」と心の中で深く思っていました。私は、いじめは絶対しないと自分で思いました。いじめは、人を苦しませ、人を不幸にさせ、自分も不幸になる大変な事だと思います。中には、「自分なんかこの世にいない」と思ってしまう自殺をする人もいました。いじめた人も、他の人からの関わりが悪くなり、その人も嫌な思いをするかもしれせん。今の時代はSNSでのいじめやティックトックでの誹謗中傷、アンチコメントで傷つく人もいます。人気俳優や女優も芸能界でトラブルが起こり、自殺をしてしまった人もいます。

た。私は、その時すごく悲しかったです。世の中に、いじめや誹謗中傷をする人がいるという事を知り、とても悲しかったし、とても残念でした。誹謗中傷は、アンチコメント、文字だけで、相手を傷つけてしまうこと、言葉だけだと、自分は相手を傷つける事を言っても相手をとらえ方によって相手が傷つく事があります。私は、文字だけで会話するのは危険だと感じました。

詐欺もとても危険です。詐欺は、他人をだまして、金や品物を奪ったり、損害を与えたりすることです。電話詐欺は、犯人が電話やハガキ等で親族や公共機関の職員等を名乗って被害者を信じ込ませ、現金やキャッシュカードをだまし取ったり、医療費の還付金が受けられるなどと言ってATMを操作させ、犯人の口座に送金させる犯罪です。日本に詐欺をする人が多く詐欺にだまされず自分で判断をし良い行動を自分でとることが大切だと思いました。もしも、自分が詐欺にあったり、詐欺のサイトに入っちゃったって思ったら、すぐに抜けて、電話の場合はあやしいと思ったらすぐに電話を切る、近くに居る人にすぐ知らせるなど自分にできる行動をとることが大切だと思いました。詐欺やいじめをする人は人権を無視している人だと思いました。人権を大切にしている人はいじめや詐欺などをしない人に思いやりがあり、お互いを尊重し合える人こそが人権のある人だと私は思いました。まず、人権は、社会を構成するすべての人々が個人としての生存と自由を確保し、社会において幸福な生活を営むために、欠かすことのできない権利であるが、それは人間固有の尊重に由来するということです。

私も、お互いが尊重しあえるように思いやりを大事にしていきたいです。相手との思いやりが深まり関係の良い友達がたくさんできると良いと思います。

命の大切さ

大泉町立北中学校 一年 田中美穂

私は「あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら」という本を読みました。その内容は、中学二年生の加納百合が七十年前の昭和二十年にタイムスリップし、同年代の男の子に出会い、その男の子が特攻隊員として亡くなるお話でした。この本を読んで、戦争について少し身近に感じられるようになりました。

現代でも戦争が行われていて、毎日多くの大切な命が失われています。日本で起きた戦争について調べてみたところ、第二次世界大戦のときには三百二十万人が亡くなっており、そのうち軍人が二百三十万人、民間人が八十万人でした。軍人のうち半数以上の百四十万人は、病気や餓死により亡くなったことを知り、戦争により直接的な原因ではなく、衛生状態の悪化や食糧不足により亡くなった方が多いことに気付きました。また、本で読んだ特攻隊員のように同じ年代の人達が、四千人も亡くなっていることに対してとても悲しい気持ちになりました。

今もロシアとウクライナで戦争が起っています。毎日ニュースで多くの人が被害を受けていることが伝えられています。その中には小さな子供達もふくまれているとのことですが。

この人権作文を書くにあたり、人権とは何かを調べて家族と話しました。人権問題には「女性差別」「高齢者」「障がい者」「インターネットによる人権侵害」「いじめ」などさまざまな問題があることがわかりました。私はその中で最も大事なことは、一人一人が安心して自由に生きることだと理解しました。しかし、今もこのような戦争が起きており、命が失われる人、ケガにより不自由な暮らしをしなければならない人、家族や愛する人を失い辛

い思いをかかえる人など、人間としての平等にある権利を理不尽にうばわれる人達がでてきます。

私は、誰かが戦争やテロによって人の人権をうばう行為は許されないことだと思っています。このような戦争やテロをなくすために、命の大切さについて知ることが大切だと思います。もし、戦争やテロが起きたら自分はどうなるのかを考えたら戦争やテロを起こすことはいらないと思います。世界のみんなが、人権についてしっかり考え、その中で最も重要な命の大切さを理解していくことがとても大事だと思います。

生きる意味とは

大泉町立北中学校 二年 小沼旺汰

二万千八百十一人。

この数字は二〇二二年の自殺者数です。僕は、この数字を見て衝撃を受けました。なぜこんなにも自殺者数が多いのか、なぜ自殺をするのか、いろいろな考えが頭を巡りました。

自殺にはいろいろな要因が複雑に絡み合っていて、到底他人が理解することではできないのかもしれませんが。しかし、要因の一つとしてインターネットがあるように思います。今のインターネット社会では、以前よりも圧倒的に悪口や自分の率直な気持ちが簡単に共有できます。そんな手軽さがゆえに誰かを傷つけてしまうことは日常茶飯事です。自分にとっては軽い気持ちで言ったことも、相手にとっては自殺の決め手になることもあり得るのです。悪口を言われたり、いじめを受けたりしたら、自分の存在価値を見失ってしまう人もいるのではないのでしょうか。もし、そこで答えが見つけれなかった

ら、最悪の場合、自殺につながってしまうかもしれません。

私は、自殺を考える人の気持ちについて考えている中で、また別の疑問にたどり着きました。それは、「私たちはなぜ生きているのか」ということです。私たちは皆、「人が人として自由に生きるための権利」をもっています。しかし、生きる意味がなければ、人権など意味をなさないのであるかと思っただけです。

私はこの作文を書き進める中で、「明確な生きる意味はない」という答えにたどり着きました。もし、明確な生きる意味があつたら、そこに向かって一生歩み続けなければいけません。「生きる意味はない」方が自由に一瞬一瞬を楽しむことができるのではないのでしょうか。むだに考えることでも、友達や家族と一緒に楽しむことができるのではないのでしょうか。

私は、よく死について考えます。生きる意味についても考えます。その答えが、今回少し分かったような気がします。きっと生きる意味がなくても目標や楽しみがあるから今を生きているのだと思います。私は、この考え方を生きる意味、自分の存在価値を考えている人に伝えてあげたいです。

そして、それができるのも、インターネットではないのでしょうか。インターネットは自殺の要因になるだけではなく、自殺を止める手段、誰かの心を支える手段としても利用できるのです。多くの人に伝わらなくても、一人でも二人でも、誰かの心の支えになればすごくうれしいことです。

生きる意味の答えはきつと一つではありません。多様化していく社会の中で、個人を尊重し合う、そんな社会が形成されれば、少しでも自殺が減り、一人一人が何か存在価値を見出せるのではないのでしょうか。

生きる意味というのは、普段何気なくそばにあるものなのかもしれないと思うのです。

「人権」を軽視してはいけない

大泉町立北中学校 二年 鈴木 瑠子

人権とは何か、まずそこを知ることから始めました。調べてみると、「誰もが生まれながらにして持っている、人間として幸せに生きていくための権利」、「人間の生存にとつて欠くことのできない権利および自由」、様々な言い方がありました。人権を大切にするとか、人権を守らなければ…と日頃、耳にすることはありますが、ばく然とどう行動すれば、人権を大切にしていることになるのか、人権を守っていること、守られていることになるのか、よく分かりません。あるテレビ番組で「その人を信用できる人かどうか判断するために、ひとつだけ質問して下さい、と言われた時、どのような質問をしてその人が信用できるかを判断しますか」という問いを投げかけていました。回答している人の中で「あなたは、人を差別したことはありませんか、もしくは傷つけたことがありますかと聞きます。その相手の答えが、どちらもありません。だったら信用できないかも知れない。考え込んだり、分かりません」という答えだったら、自分にとつては、その相手のことを「信用する」に近づくとステップとして有意義な答えだと思う」と話していました。私は、その回答を聞いて、「なるほど」ととても納得しました。

なぜなら、自分自身にそのつもりはなくても、相手が差別されたと感じていたり、傷ついていたら、自分のその言動は、自分が知らないところで相手を差別し、傷つけていることになるのです。だから「誰かを傷つけたことはありませんか」の問いに対する「分かりません」という答えは、私の中では、正解なのではないかと考えました。どのような言葉や行動をされたら傷つくのか、それは人それぞれであり、それを知り気をつけることは難しいです。私は携帯を持っていますが時々、SNS等で、悪意が感じられるコメントを

見かけることがあります。著名人が顔も知らない人たちから誹謗中傷を受け、それを苦にして自殺したというニュースを見たこともあります。なぜ傷ついた方が命を落とさなければならぬのですか。顔が見えなければ皆が言っているから、何を言っても良いのですか。そこには、人権が侵害されている、という事実しかない様に感じます。

人権を守るため、大切にするために必要なことの一つは、言葉を発する時、何か行動をする時に、自分にその行動が向けられたら、自分はどう思うのかをよく考えることだと思います。

自分の行動を客観的に見ることは難しいですが、自分の言動を客観的に見ようともせずに、皆が過ごしていたら、人権が守られるどころか、人権の存在さえ無くなってしまうのではないかと怖くなります。私たちが、幸せに生きたいと思うのならば、人の立場に立つということを忘れてはいけないと思います。

平和で安全な社会のために

大泉町立北中学校 三年 井 汲 彩 寧

最近、高齢者が詐欺事件の被害にあうケースが多発している。ここ数年で特に多いのは「特殊詐欺」だ。

特殊詐欺とは、通信手段を用いて親族や公共機関を装い、不特定多数の人から現金をだましとる犯罪のことである。代表的な手口としては「オレオレ詐欺」「キャッシュカード詐欺盗」「架空料金請求詐欺」などがある。警視庁は、令和四年の特殊詐欺について認知件数は一七五二〇件、被害額は三六・一四億円と発表している。なかでも高齢者（65歳以上）の占める割合は八六、

六%と大きな割合を占めている。詐欺事件の事例は息子や孫になりすました犯人が「交通事件を起こした」や「会社のお金を横領した」などと偽って口座にお金を振り込ませたり、現金を郵送させたりするケースや犯人が警察になりすまし、口座が詐欺の被害にあっていると嘘を言い、キャッシュカードをだましとる詐欺など手口は日々巧妙化している。八十代の男性が息子を助けたい一心で計五五〇万円を渡してしまった事件を見たときは本当に胸が痛んだ。高齢者が詐欺被害にあつてしまう一番大きな理由は昼間家にいることが多く、固定電話を使っているから。人の弱みにつけこんで優しさをふみにじつてお金をだましとろうなんて、劣悪で最低な行為だと思う。さらに被害者のうち約八割の人が「自分は詐欺にあうとは思っていなかった」と解答している。私は常に自分が被害にあうかもしれないという危機感を持ち、どのような事件があるのかを知ることが大切だと思う。私もこのような詐欺の事件があることを知ってから、祖父母に録音ができる固定電話を買うようにすすめた。祖父母との関係を密にし、異変により早く気づけるようにしていきたいと思う。

詐欺の事件の被害にあう危険があるのは、もちろん高齢者だけではない。ワンクリック詐欺やデパート商法、通信販売での詐欺など若い人でも、誰でも被害にあう可能性があることを忘れてはいけない。このような事件は決して人事ではなく、自分にも起こるかもしれないという危機感を持ち続けることが大切だ。一番良いのは詐欺による被害がなくなることだ。だが、今の状況ではそれは難しいと思う。だからこそ被害を少なくするために、そしてなくすために、今自分にできることを考えることが大切だ。このような被害がなくなることを願っている。

誰もが幸せに暮らせる社会にするために

大泉町立北中学校 三年 古溝 紗 来

私は金子みずぶさんの有名な詩「私と小鳥と鈴と」が好きです。なぜならこの詩は、私達に個性の大切さを教えてくれるからです。

この詩を初めて聞いた時、私は個性の大切さに改めて気づきました。今の日本では誰もが尊重される権利をもっています。しかし、現実では十分に尊重されていない人もいます。例えば人権や性別による差別やいじめ、戦争や虐待などです。実際、有名なタレントでトランスジェンダーである、りゅうちえるさんが自殺で亡くなりました。りゅうちえるさんが性同一性であることが分かってから、SNSでは多くの誹謗中傷が見られるようになりました。そのほとんどが憶測や思い込みから来る偏った批判でした。りゅうちえるさんが自殺してしまった原因は分かりませんが、私はりゅうちえるさんに向けてられた多くの誹謗中傷が影響していると思います。なぜかという、以前私も自分への悪口を聞いてしまったことがあり、凄く辛い思いをしたからです。一時期は仲の良い友達も、私の悪口を言っているのではないかと疑ってしまふようにもなってしまうました。私は一度聞いただけでこんなにも辛い思いをしたのに、りゅうちえるさんはその何倍も辛く、悲しく、苦しい思いをしたのではないかと思うと胸が痛みます。そして、りゅうちえるさん以外にも性同一性であるだけでいじめられ、辛い思いをしている人は今でも沢山います。私はその現状を初めて知った時、なぜ何の罪もなく生まれてきた人達かと思ひ込みや偏見によって傷つけられなくてははいけないのか。と悔しくなりました。

どうしたらこの現状を変えられるのだろうか。そう考えた結果、まずは全員が性同一性障害について知ることが必要なのだと思いました。そして私もこ

の機会に色々調べてみました。まず性同一性とは自分の体と、自分が感じる性別が一致していないことを指します。例えば、男性の体を持っているが女性として生きたいと思う人、その逆の人などが挙げられます。しかし、性同一性については多くの人がそれを理解しておらず、不当な差別や偏見を受けてしまいます。こうした差別的扱いは、性同一性をもつ人々にとって大きなストレスや不安を引き起こしてしまいます。そのために私達は性同一性をもつ人々も安心して送れる社会、誰もが幸せに暮らせる社会を目指すべきだと思います。

実際に調べて考えてみて、私は最初に紹介した金子みずぶさんの詩のように、みんなが個性をもち、それを尊重し合える、そんな世界になってほしいと思いました。

人権について考えたこと

大泉町立西中学校 一年 中西 煌 音

最近、よく目にしてきた芸能界の人が自殺をしてしまった。その人は性別を変え、新しい生活を送っていた。きっとその人も幸せだったと思う。だが、周りからは批判され生きずらくなってしまうたのだろうか。

私も生きづらいなど感じることは多々ある。「らしく」や「なんだから」のような言葉に縛られ、髪を短く切ったら「男の子みたい」と言われ少し辛かった。でもそんな私を受け入れてくれる友達もたくさん居てくれた。そのとき、私の生きる場所を与えてくれた気がしてうれしかった。

私は人権について「そういうのもあるんだな」という考え方をしたいと思つた。なぜなら私は人権も行き過ぎると、逆に生きづらくなる人も出てくる

のかなと思つたからだ。

「ジェンダーレス」を例にして考えてみる。ジェンダーレスは性別にとらわれない、性別で差別をしない、といった意味がある。一見多様性を考えられた良いものだと思われるが、ジェンダーレスが行き過ぎると、「ジェンダーレスの時代だから女子力はじめ」や「性別を聞いてはいけない」、「一人称の制限」、「メイク禁止」など普通に生活するのも難しくなるかもしれないと思つたからだ。

私は、新しい考えも取り入れるのが多様性だと思つた。今ある考えもそのままに無理に認めさせるのではなく、少しずつ違った違う考え方も認めていき、そういう人も居るよね、そういう考え方もあるよねといった認識でみんなが生きやすい世界に少しでも近づけばいいなと私は思っている。

私は人権について考え直したり、そもそも人権とは何なのか改めて考えたりして、新しい考え方やとらえ方ができ、どういったことをすればいいのか、どうすればみんなが生きやすくなる世界になるのかが少し分かった。これから私は人権のことをよく考えて生活していきたいなと思つた。

誹謗中傷をなくしたい

大泉町立西中学校 一年 池田陽葵

みなさんは、「きもい」や「うざい」などの言葉を言われた事がありますか。面と向かつて言われたことのある人は少ないと思います。最近、SNSの発達で、顔と顔を合わせなくても悪口を言えてしまいます。いわゆる、誹謗中傷です。私は、誹謗中傷の意味をくわしく知らなかったので調べてみまし

た。すると、「悪口や根拠のない嘘等と言って、他の人を傷つけたりする行為」と書いてありました。

そこで私は、誹謗中傷をなくすために何が大切か考えてみました。すると「差別をなくす」という考えが一番最初に出てきました。差別といえば、人種差別が出てくる人がほとんどだと思います。人種差別にも、黒人と白人の差別や身分的差別などたくさんありますが、私が気になったのはジェンダーです。ジェンダーとは、男性と女性の役割の違いにより形成された性別のことです。例えば「料理は女性がするもの」「仕事は男性がするもの」など、「女らしさ」「男らしさ」という文化的に作られた意識のことです。だから「男なのに弱い」や「女なのに強い」などの差別をなくしたいです。私は常識にとらわれず、女であろうが強くてもいいと思います。ですが、SNSなどで見た目で判断してしまう人も少なくはないと思います。SNSを見てこういう言葉を見た時あまりいい気分ではありません。つまり、人を見た目で判断してはいけないということなんです。そして思つたことをすぐ言ってしまう、書いてしまったたりすることもよくないんだということが分かりました。私も言葉選びは、しっかり気をつけないといけないなと改めて実感しました。

インターネットやSNSが進んでいる現在では、色んな事が便利になっていますが、その使い方について私たちは改めて学ばないといけないなと思います。「きもい」や「うざい」などの誹謗中傷ではなく、「楽しい」や「ありがとう」などのみんなが幸せになれるような言葉でうまれる社会になってほしいです。私も誹謗中傷についても一度しっかり学んで、今後の生活で意識していきたいです。みなさんも意識してみてください。

違い

大泉町立西中学校 二年 石井 友里愛

みなさんにとって「障がい」とはどんな存在ですか。みなさんは「障がい者」の方たちに対してどんな考え、思いを持っていますか。「普通と違って少しおかしい」、「怖い」と感じる人。「かわいそう」「大変そう」など同情的感情を抱く人。「そんなこと聞かれてもよく分からない」と思う人。いろいろな考えの人がいると思います。逆にそれが当たり前なのかもしれません。

しかし、障がい者も健常者も同じ人間だということ、人が生まれ持つ権利には、有無も大小もないということは、みんなが共通して持つべき考えだと思います。そのため、障がい者が職場や学校で嫌がらせやいじめを受けたり、職場において差別的な待遇を受けたり、店舗でのサービスを拒否されたりなどといったことは絶対に起きてはならないことなんです。

それにも関わらず日本では、そういったことが当たり前起きてしまっているんです。

では、なぜそういったことが起きてしまうのでしょうか。いろいろな理由がある中の一つとして私が考えるのは、世の中に健常者が普通といった勝手な「基準」ができていくからということ。いつから障がい者より健常者の方が偉くなったのでしょうか。もちろん、障がい者の足りない部分を健常者が補ってあげることが大切だと思います。けれど、障がいの有無だけで立場に上下ができてしまうのは、おかしいと思います。

みなさん、考えてみてください。身体に障がいを持つ人、知的に障がいを持つ人、何の不自由もない人の違いは何かということ。身体に障がいがある人は、私たちと少し違う外見をしていたり、知的に障がいがある人は少し違った感覚を持っていたりします。つまり、私たちの判断の基になっている

のは、見た目にすぎないということです。しかし、障がいがある人もない人も「喜怒哀楽」といった感情は同じようにあります。また、その感情には、何の違いもありません。見た目だけで差別されている人がいる日本や世界の現状を、もつと重いこととして考えてほしいです。

「人権」というものがこの世にある限り、傷ついたり、奪ったりすることは、どんな理由であろうとあってはいけないことです。しかし、人権は一人だけの力では守れないと思います。「一人はみんなのために。みんなは一人のために」。この言葉のように行動することで、差別のない世界を作り、みんなが平等に人権を持ち、守ることができると思います。

男女差別と固定観念

大泉町立西中学校 二年 二瓶 貴輝

僕は以前、総合の特別授業で認知バイアスの授業を受けました。その時、男女どちらにも当てはまる条件なのに、この条件に当てはまるのは男性が多いなど勝手なイメージから推測してしまいました。

例えば「赤のランドセルを背負った小学生が将来は看護師になりたいと言っていたよ」と聞いたら男女どちらの小学生を思い浮かべますか。多くの人は女の子を思い浮かべるでしょう。これは、赤のランドセルを使っている子は女子が多いこと、そして看護師という職業には女性が多いことからイメージしたのでしよう。ですが、赤のランドセルを使っている男の子も、看護師という職業についている男性も、少数かもしれませんがいます。

このような説明を受けたときに、自分がイメージで推測してしまっていたのかと、驚きました。自分は男女差別なんかしていないと思っても、こ

ういう固定観念から知らず知らずのうちに差別をしてしまっているのかも気付かされました。そして、このような認知の壁から傷ついている人もいるのかもしれないと思いました。

確かに、男女の体力や運動能力の差は著しいものがあります。例えば、女性が工事現場で一日労働したとしても、男性がした仕事の量よりも劣る場合が多いでしょう。だからと言って、女性はその職業についてはいけないという訳ではありません。ですが、今、日本は政治参画や経済参画への男女の格差を示すジェンダーギャップ指数が低い状態にあります。特に政治参画の面では、まだまだ男女平等とは言えません。

しかし、女性の多かった職業に男性が就いたり、男性が多かった職業に女性が就いたりするような話や、内閣の重要な役職に女性が就いたりするような話も最近、良く耳にするようになってきました。

このように、年々男女平等な社会へ近づいていると思います。LGBTQの人達への理解も深まっていると思うし、「男らしさ」や「女らしさ」ではなく「自分らしさ」を尊重できるような社会へ近づいていると思います。ですが、「完璧な平等」へはまだまだ長い長い時間を要すると思います。一人一人の男女への理解が深まっていくことで、その時間は徐々に短くなっていくのかなと思います。平等な社会を目指すことも必要ですが、「男女が支え合える社会」も目指せばさらによいなと思います。

いじめ

大泉町立西中学校 三年 町田 羽 奏

「いじめ」誰もが身近で一度は耳にしたことがあるだろう。一言でいじめ

といっても種類はたくさんある。例えば、言葉、仲間はずれ、暴力、ネットなどだ。

私は小学生のときに仲間はずれにされたりランドセルに心ない言葉を書かれたりしたことがある。すごく悲しい気持ちになり、学校に行きたくないと思っただけ、行かないと負けてしまう気がした。だから学校に行かなかった。ランドセルのことは先生も知っていたため少し安心することはできたが、心のどこかでは、またなにかをされてしまうのではないかと不安はあった。しかし、いじめをした本人はいじめをしていると思っていないかと思う。ただそのときの感情だけでやったのだと思う。その後、いじめられた相手がどのように感じて、どれだけ悲しい気持ちになるのかを考えずに行動したのだと思う。また、今はもう自分がどんなことをしたか忘れていると思う。それが「いじめ」だ。いじめを受けた人だけが忘れることのできない、消えない心の傷をおい、それをつけた人は何一つ覚えておらず、全て忘れている。私は、そのようなことが絶対にあつてはならないと思う。もし、相手の気持ちを一番最初に考えていけば、そのようなことにはならない。そのため、相手に思いやりの気持ちを持つことが何より大切だと思う。

また、最近大きな問題になっているネットでのいじめもある。それは「誹謗中傷」だ。これでたくさんの方が自ら命をおとしている現状がある。特に芸能人などの人の前に立つ仕事をしている人にとって、ネットは欠かせないものだが、自殺者が増えている状況でも本人に届くような形で悪口を書いている人がたくさんいる。人に対する色々な気持ちを抱くことは自由だろう。しかし、その気持ちを本人の見える所に書きこむのは間違っている。芸能人も自分たちと同じ人間で、同じ感情を持っている。言葉は簡単に人の命を奪うことのできる恐ろしいものである。自分のストレスを発散したり、嫉妬したりしてその気持ちをぶつけている人もいるだろう。そして、そんなメッセージを送ったことも忘れてしまうのだ。しかしそれは違うと思う。言葉は人

を傷つけることも、元気づけることもできるのだ。思いやりの心があれば、応援の言葉や元気の出る言葉を自然と選べるようになると思う。

このように、「いじめ」をなくすためには相手の気持ちや立場を考えることが大切だ。やっていいことなのか悪いことなのか、言っていることなのか悪いことなのか。当たり前のことのようだが、今もう一度一人一人が判断して行動していくべきだと思う。

男女格差について

大泉町立西中学校 三年 齋藤 芭奈

「性別にとらわれなくて良い」テレビをみていたら、このような言葉を聞いた。最近、「ジェンダーレス」「男女差別」「男女平等」など、性別に対する言葉をよく聞くようになった。近年、世界的に男女とわず平等な社会作りに取り組んでいるからだ。だが、取り組んでいく中で、反対する人や多くの問題と直面している。私は、今世界でどのような問題がおこっているか、調べてみることにした。

その中で、私が特に気になった問題は、「男女格差」である。私は以前、祖母に家事を教わった時、「家事が上手になれば、良いお嫁さんになれるよ」と言われたことを思い出した。その時私は、幼かったので、素直にとらえていたが、今思えば、この言葉でさえ男女格差を生んでいるのだと気づいた。男性の役目は外で働いて家族を養うこと。女性の役目は、子供を産み、育てることといった、無意識のうちに、昔からの習慣や伝統として、今までうけつがれている問題があるのだとわかった。そのため、女性が働くことができなかったり、男性より女性の方が下だと思われることがあるのだと気づいた。

私は、このような無意識な「男女格差」でも、無くしていくべき問題だと思った。同じ人間なのに、性別という概念があることで、役割がきめてあったり、行動に制限があったりすることは、生き方を決められているようで、嫌だなと感じた。最近では、このような格差が昔よりなくなってきたことは確かだ。男女差別や格差がへり、ジェンダーレスなどという言葉ができていくことも知っている。だが、すべてなくなったわけではない。例えば、ドラマなどで、仕事から帰ってきた男性に、女性がごはんを作り、出むかえるシーンを見ることがある。それを見ると、今もまだ、多くの人の意識の中で男女格差がなくなっていないんだなと実感する。このような問題を解決するために、日常生活を表現しているドラマなどで男女格差のないシーンをふやしたり、小さい子には男女とわず、家事を教えたり、子育てについての勉強を教えたりすることが大切だと思う。

今の世の中を男女平等にするためには、トイレの指定や、学校の校則などの無意識に差別してしまっている問題と直面するだろう。あたり前のよう過ぎしてきたことさえ、差別だと言われることもあるだろう。だが、たとえ反対派や賛成派にわかれていたとしても、互いの意見を伝え合うことが大切なのだと思う。この世界に住む人たちが全員が住みやすい世界にするために、考え直さなくてはいけない問題がたくさんあると思う。その問題一つ一つに目を向けられるような生き方をしたいと思った。

小学生標語

南小

四年 清水琴葉
 五年 森心菜
 五年 田楽々
 六年 篠田大幸
 六年 峯岸雅姫

ともだちは ケンカをしても すぐなかなあり
 個性はじじ色 みんなそれぞれ ちがう色
 手をとって かおをあげれば 広がる笑顔
 比べずに 自分の個性を 大切に
 胸を張って 生きてても いいでしょ
 大切に いつでもどこでも やさしさを

北小

四年 金井心美
 四年 槻岡凜
 五年 古賀日菜子
 五年 岩渕こはる
 六年 小堀恵菜
 六年 野崎夢子

えがおのまほうは やさしい気持ち
 手を取って わらっていられる 世の中に
 たくさんの色で じゆうにえがく 心の輪
 大丈夫？その一言が なにより君を 救つんだ
 ありがとう 笑顔になれる その言葉
 変じゃない 自分で選ぶ 生き方で

西小

四年 イエサアヤミ
 四年 中島優月
 五年 松井優花
 五年 三浦柚月
 六年 山川奈々羽
 六年 本橋魁人

ありがとう 言えばみんなが いい気持ち
 さべつなし みんなのこせい 大切に
 差別なし 友達みんな 笑顔だよ
 変じゃない 否定しないで 人の個性
 輝かせよう 自分の個性 みんなの色を
 なくそうよ 差別と偏見 仲間はずれ

東小

四年 鈴木慧悟
 四年 久間田翠菜
 五年 島山日菜詩
 五年 齊藤杏莉
 六年 松嶋咲希
 六年 岩崎友香

思いやり みんななかよく 明るい町
 みんなのしあわせ いっぱい集めて 花の笑顔
 やさしさは 未来の君に かえってくる
 手伝うよ あなたの一言 みんながえがお
 あなたがたなく笑顔の連鎖
 つながろう 優しい言葉「大丈夫？」



平和都市宣言

平成 29 年 4 月 8 日 制定

大泉町は先の大戦中、空襲で多くの尊い命と大切な財産を失いましたが、町民の弛（たゆ）まぬ努力により、平和な工業都市へと発展することができました。

しかし、今もなお世界各地で紛争、テロリズム、犯罪などにより、日々多くの人々の命が奪われています。

私たち大泉町民は、戦禍を克服し、生まれ変わったこの緑豊かなふるさとを、未来の子どもたちへとつないでいかなければなりません。

大泉町発足 60 周年にあたり、平和を願う世界の人々とともに、永久の平和を実現するため、私たちは、ここに「平和都市」を宣言します。

人権尊重と福祉の町宣言

平成 6 年 5 月 20 日 制定

人は、みな個人として尊重されなければならない。

幸福追求の権利は、何人に対しても自由にして平等に与えられた基本的人権である。

わたくしたち大泉町民は、相互の理解と協力によりすべての者が、人権を尊重され人間らしく健康で文化的な生きがいのある生活ができるよう次の事項を指針として、真に自由にして平等な明るい町づくりを進めることを誓い、ここに「人権尊重と福祉の町」を宣言する。

- 1 人権を尊重し、支えあう力と心のぬくもりで、
みんなにやさしい町にしよう。
- 2 高齢者をうやまい、
健康で生きがいのある生活に手をかそう。
- 3 障害者の人格を尊重し、
持てる力を発揮できるように支援しよう。
- 4 病弱者にやさしく接し、心の友となろう。
- 5 子供たちを愛し、
心身ともに健やかに育てよう。